
ホシノカケラ

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホシノカケラ

【Nコード】

N1885S

【作者名】

蒼月

【あらすじ】

影「よう。まあゆっくりしていけよ」

影「うー

んとなんかネジの飛んだ野郎にこの小説について話せとか言われたんだが・・・帰っていいか？」

影「あゝさっさと終わらせるか・・・この小説はフィクションです。はい！終わり！んじゃあな」

作者「ちょwwwまでやコラwww肝心なことをいつt・・・」

作者「まったく・・・あっ！どもですw自己紹介は？の台本風に書いてありますから省略しますw」

この小説のあらすじ的なものは！

1、美少女がでます。 2、カテゴリはオブラートに包まれています
が厨二臭くてちょっと(?)痛いですw 3、銃的な出ます。ま
あ・・・作者は世間で言う軍事オタかも? 4、wを使いますw
おっとwすでに使っているしw 5、学園物です。 6、言うま
でもないですけど国語の評定は2、3とかです(キリッ

ここを借りて、登場人物を名前をつけてくれた、名付け親のすみしょん師匠！本当にありがとうございました！

すみしょん師匠もすばらしい小説を書いているのでそつちも見てください！

モバゲー小説『今、愛しています!』『ジヨエル』夜空の魔王と暁の黒百合』ect・・・

それでは亀更新のファンタジーコメディの始まり始まり

少女「始まるわ。」

―ある赤道付近の熱帯雨林―

ザワザワ……………ガサツ！

見渡す限り森が続くところに気温が高いのにも関わらずに、灰色のロープでフードを被ったまま移動する少女がいた。

ペースを落とさずに走り続けているのに息も切らしていなかった。

ガサツ！タツタツタツ……………

無言で移動する。

少女は遠くの木と木の間には小屋が見えると足を止めた。

小屋に目を凝らすと、ロープの間に手を入れ、双眼鏡を取り出し、小屋を観察した。

しばらくして、少女が首についている無線機の発信ボタンを押すとテキパキとした口調で報告した。

「こちらリーパー1。ターゲットのいると思われる小屋を発見。指示を。」

「了解した。リーパー1はリーパー2が来るまでそこで待機。」
返ってきたのは低めの威厳のある声だった。

空白を入れると、周波数はそのまま男が命令をした。

「きこえるか？こちら本部だ。リーパー1が目標を見つけた。そこから真東に300mにいる。はやく向かえ。」

「りょーかい。300mかよ！あゝめんどい！」

返答は軽い声だった。

小屋から約300m離れたところでは熱帯のジャングルの下でお構いなしにしゃがみながらローブをばたばたと動かし、涼をとっている若い男がいた。

さっきの少女とは違い、フードはかぶっておらず、髪は結構長い。それに明るい茶色に染められている。

5

「あゝあ・・・あちい・・・こんなところにいたくねえ・・・」

一人でもかわらずに無駄な独り言をブツブツと言っている。

「はあゝなんでこんな任務してんだろ・・・つかここ県外じゃん！
まともにメールもできねえゝじゃん！」

「リーパー2、何をやっている。早く目的地に行け。」

「うるさいなあ！こっちはこんな暑いとこにきてんだし！そっちはぼんぼん命令だけしていればいいようだしなあ！！」

「おい……いい加減にし……」

「わかってるって！はあくどんだけ頭固いのだか……」

「言っとくがリーパーはもう目標に着い……」

「え！？ガチで！？やべえ……じゃあ早く終わらせますか。よっ
と！」

焦りながらすばやく立つと、男はすでにいなくなっていて、ジャングルは静けさ取り戻していたのだった。

林道を走る一台のハンビーがいた。

「もう少し早く来れるはずなのにどうして3分も遅れたんですか？」

「いやそれは、ジャングルは初めてだったんで……いや嘘です！すみません……だからそんな怖い目で見ないで……」

ハンビーの後部座席でさつきジャングルにいた男が、ロープに身を包んでいる少女に説教されていた。

「ほんとにすいません……」

男が少女に手を合わせて謝ると、少女は男の額を指でグイッと強く押し

「まったく……次やったらそのチャラチャラした長い髪の毛を全部抜き取って、出家させるのでそのつもりで。」

ガタガタっ！ガタガタガタ……

男はフードの中からも感じ取れる恐怖に言葉が出なくなった

舗装されていないため、かなり揺れていたが、しばらくして前方が森だった眺めが、輸送機などの出入りする、軍用の滑走路が見えてきた。

入り口でハンビーの運転手が門番の軍人に紙のようなものを見せると、ゲートが開き、門番が敬礼した。

そこからやっとな舗装された道路からハンガーから出た一機のC-1輸送機に向かっていき、ハンビーが滑走路で待機していたC-1輸送機の後ろに止まると、二人は運転手に敬礼をし、

二人はダツフルバックを手に、輸送機の後部ハッチの中へと入っていった。

「あのさ、何でロープ着てんに暑くねえの？オレもう超暑くて死にそうなんだけど！」

男は輸送機に座ると、ロープを完全に着崩しながら少女にせまった。

「暑い？そんなわけじゃないですか。嘘はやめてください、焔の能力者のくせになんてざまですか。」

少女はフードのしたからでもわかるくらい冷たい眼差しを男はまだ懲りてないのか気にせずに

「まあいいじゃん細かいことは！なんでかなー？？」

男は軽い感じに話そうとしただが、それが自爆となった。

「知っているくせに聞かないください。そういうのウザイってい
うんですよ。わかったらささっと座りなさい、女たらしが。」

「ひ、ひど……………」

よほど痛かったのか、輸送機の中の椅子にもたれかかると、彼は・
・真つ白な・・灰になったのであった…………

b y 作者

しばらくして、他の兵士達が作戦を終えたのか武装ハンビーに乗っ
て、2人が乗っている輸送機にぞろぞろ入ってきた。

おそらく、顔立ちと装備から見て、アメリカの特殊部隊といったところだろう。

時間になったらしく、輸送機の後部ハッチがしまり、滑走路を飛び立っていった……

「……起きるよ。」

「うーん・・・」

「ジャック！起きろって！！」

金髪のモヒカンのような髪型の大男はむやみにうとうと仰向けで寝ていたすっきりとした体格の金髪の男の体を思い切り揺らした。

「うっせんだよ！！！！」

ジャックという男は乱暴に起こしてきた大男に右ブローを食らわせた。

「いって！何だよ？喧嘩売ってんのか！？」

大男は軍服の腕をまくと、思い切り睨み付けてきた。

「それはてめえだろ！！」

軽く突っ込みを入れると、もう一度寝ようと横向きになろうとする。

するとそれを拒むように体を揺らしてきた。

「何だっというんだ！俺は任務疲れなんだよ！それにC-1の椅子はかてえんだよ！早く寝かせる！」

「じゃあ疲れを飛ばすことでも教えてやるぜ！」

「なんだよ？いつてみるよ。」

興味を持ったのか、ジャックは大男に向かい側に座っているフードをかぶった少女を見ると

「あそこだよ。めっちゃいい女だと思わねえか？」

ジャックは大男の視線にあわせると、椅子にもたれかかってうとうととしているローブとフードで身を包んだ人がいた。

「おいおい。あれ女か？厚いローブとフードで分かんないけど。」

「だめだなくだからいい女がゲットできないんだよ！」

男は勝ち誇ったような感じできると、ジャックに熱く語りだした。

「まあ簡単、簡単！まずは身長だろ？どうみても低いだろ？次にフ
ードから出ている髪質！そして決め手があー！！胸だあー！！」

そこまで熱く語るなって・・・

男の語り気づいたのか、他の隊員たちも集まりだし、輪になって、
椅子にもたれかかっている謎の少女について話し始めた。その中に
俺もいるのは・・・まあいいか！

「いくらなんでも背が低いだろ！」

「もしかして東洋人だったりして！」

「ないない！こんなところにくるのはおかしすぎるだろ！」

そこに先ほどの大男が話に割って入ってきた。

それも確信を突いたことを。

「でも思ったんだが、こんな軍用輸送機に少女ひと・・・違った。少女と若い男はなんているんだ？それも東洋人だぜ！」

「いやさつき東洋人とは言い切れないっていったらだろ。」

すかさずジャックが突っ込みをいれる。

「いいや。若い男の顔をよく見る。東洋人の顔だぜ。」

男の言葉に従い、ジャックは燃え尽きた体勢でいる若い男の顔を見ると、少しだが東洋人というのがわかる。

「でも片方が東洋人だって決まってもあそこの少女は東洋人だってわかんないだろ！」

ジャックが反論する。

「いいや。実は根拠になる理由が可能性が低いが、あるにはあるんだぜ。」

「あれか！そういうえばそうかもな！」

男の言葉に、隊員の皆がいきなり共感し始めた。

「何のことだ？」

ジャックはわかっていなかったらしく、頭を捻った。

「そっぴいジャックはここに配属されたばかりだよな。しかたないな。教えてやるよ！」

男は一息つくと、話し始めた。

「その前に確認するが、現在、テロや過激派の大きな行動は俺たちが出勤するだけで、少ないだろ？」

確かにそうだ。現在、テロなどは比較的少ない。でもどうしてその話を？ジャックは頭をかしげるばかりであった。

「それが少なくなった時期はな、たった5年ぐらい前なんだよ。そ

れに滅り方が尋常じゃない。激滅したんだ。」

「ああ。確かにそうだ。でも何でそんな軍人なら誰もが知っている事を今頃言うんだ？」

「よし。じゃあ前置きはこれぐらいにしとくか。」

男はしゃべり疲れたのか、近くにあった隊員の誰かのバックパックを漁り、水筒を見つけると、一気に飲み干した。

「ああうめえ。あ？すまん。」

隊員は男に逆らえないらしく、一言ぐらい愚痴ると、話を聞こうと輪に入ってきた

「よし。話を再開するか。組織の成立からだな。さっき話した激滅の話があるだろ？それには裏があるって言って、原因を調べ始めたやつらがいたわけだ。それでやっと見つかったことが……」

「は？ちよつと待て！」

ジャックは話をいきなりとめた。

「おかしくないか？やつらつて事は、たくさん的人数つてことか？
どれだけの人をそんなことに使つたんだ！？」

「そつだ。かなりのだ。政府が直接命令して調べさせたつて言う説
もあるぜ。」

男は続ける。

「それでな手にいれた情報は、不思議な力を持った東洋人で構成さ
れた。若者の集団・・・いや組織が5年前に結成されたらしい・・・
」

男が話し終わると、隊員たちは向こう側に座っている二人を見た。

「なーんてな！これはこの特殊部隊にしか噂されていない、ありえ
ない話だよな！！つたく！んなわけないだろ不思議な力つて！」

男は高らかに笑い出し、隊員たちも徐々に笑い出して、さっきのシ
リアスな雰囲気とは逆になり始め、最後には輸送機が騒音部屋にな
っていた

だが、ここで三人、険しい顔をしていた。初めて嘘らしき話を聞かされて真面目に考え始めたジャックと、迷惑な顔をしている、反対側に座っている若い男と少女だった。

少女「始まるわ。」（後書き）

どもW作者ですWこんなダメなクオリティですみません・・・

見てくれたらすこしでもいいのでレビューしてくれると嬉しいですよ！

次の投稿は未定ですけど待ってくれたら作者は泣いて喜びます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885s/>

ホシノカケラ

2011年10月6日17時36分発行